

埼玉アートシアター通信

2015 7月-8月

SAITAMA
ARTS THEATER
PRESS
VOL.58

彩の国シェイクスピア・シリーズ第31弾

『ヴェローナの二紳士』

THE TWO GENTLEMEN OF VERONA

蜷川幸雄演出

『ハムレット』『海辺のカフカ』

ロンドン公演レポート

パリ市立劇場『犀』

ボワヴァン／ウバン／ラリュール

『En Piste - アン・ピスト』

タンブッコ・パーカッション・アンサンブル

NHK交響楽団 下野竜也(指揮) 清水和音(ピアノ)

フランチェスコ・トリスターノ

CONTENTS

- 03 〈PLAY〉 蜷川幸雄演出『ハムレット』『海辺のカフカ』
ロンドン公演レポート
- 06 〈PLAY〉 松岡和子(翻訳)に聞く 若きシェイクスピアの紡ぐ“きらめくせりふを楽しむ舞台”
彩の国シェイクスピア・シリーズ第31弾
『ヴェローナの二紳士』
- 08 〈PLAY〉 パリ市立劇場『犀』
- 10 〈DANCE〉 歌と踊りを愛してきた“すべての”人々へオマージュを捧げる
ボワヴァン/ウバン/ラリュール『En Piste—アン・ピスト』
Interview ダニエル・ラリュール
- 12 〈MUSIC〉 グラミー賞ノミネート4回の打楽器アンサンブル
タンブッコ・パーカッション・アンサンブル
- 14 〈MUSIC〉 NHK交響楽団 下野竜也(指揮) 清水和音(ピアノ)
もぎぎ流「ラフ3」&「ベト7」の楽しみ方
- 16 〈MUSIC〉 自作とバッハで別次元の世界へ
ピアノ・エトワール・シリーズ アンコール! Vol.4
Interview フランチェスコ・トリスターノ
- 18 REPORT テロ・サーリネン ワークショップ
- 19 REVIEW
- 20 イベント・カレンダー／チケットインフォメーション／彩の国シネマスタジオ
- 23 INFORMATION
- 24 〈COLUMN〉 岩松 了 連載「どっちつかずの天使」

[表紙] 彩の国シェイクスピア・シリーズ第31弾『ヴェローナの二紳士』

編集◎川添史子、榊原律子 デザイン◎柳沼博雅

©公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団 Published on 15 July 2015 All Rights Reserved by Saitama Arts Foundation
※掲載情報は、2015年6月25日現在のものです。公演は追加および一部変更される場合がありますので、ご了承ください。

蜷川幸雄演出 『ハムレット』 『海辺のカフカ』



ロンドン公演レポート

英国バービカンセンターより招待を受け、
5月にロンドンで公演を行った蜷川幸雄演出『ハムレット』『海辺のカフカ』。
蜷川の80歳を祝う記念公演と銘打たれた同公演の、現地レポートを送る。

取材・文◎秋島百合子 (ロンドン在住ジャーナリスト)





「海辺のカフカ」はガーディアンで4つ星を獲得

「日本の原風景」から現代日本を探る『ハムレット』

今やイギリスでもすっかり定着した蜷川幸雄は、80歳を迎える年にふさわしい特別企画として、5月下旬に『ハムレット』と『海辺のカフカ』の2本立てをロンドンのバービカン劇場で上演した。英国デビューは仏壇の中の『NINAGAWA マクベス』がエジンバラ国際フェスティバルに参加した1985年。今年はその30年目という節目の年でもある。

まずはイギリスで上演された蜷川のシェイクスピア劇を駆け足で振り返ってみたい。『マクベス』の後、舞台を佐渡島の能舞台に置き換えた『テンペスト』(1988)、石庭に浮かび上がった『夏の夜の夢』(1995)、楽屋風景から始まり、哀しく思慮深く演じた真田広之主演の『ハムレット』(1998)へと続く。翌年にはロイヤル・シェイクスピア・カンパニーと共同製作でイギリス人俳優を起用した大企画『リア王』(1999)が実現した。残酷さをビジュアルの美学で包んだ『タイタス・アンドロニカス』(2006)と『コリオレイナス』(2007)、荒唐無稽なロマンス劇を幻想劇に仕立てた『ペリクリーズ』(2003)と『シンペリン』(2012)という、イギリスでもなじみの薄い作品を分かりやすく演出した。合間にイギリス人俳優による小規模な『ハムレット』(2004)で伸縮自在の柔軟性を見せ、歌舞伎版『NINAGAWA 十二夜』(2009)では華麗な伝統演劇の奥深さを披露した。

この実績をもとに藤原竜也主演の『ハムレット』が、5月21日から24日まで上演された。

「『ハムレット』が日本に紹介された19世紀の日本の原風景」として2階建ての貧



2階建ての長屋が、バービカン劇場の舞台上に登場した

しい長屋が舞台を囲む。その前でキャスト全員が一列に並んでお辞儀をする。そうすればシェイクスピアを演じるのが現代の日本人であることが分かり、リアリズム演劇に慣れたイギリスの観客も納得する。

長屋を覆う煙の渦とそれを突き刺すような縦の光線が立体画のような舞台を作り、その美しさに観客はうっとりする。そして藤原を筆頭とする俳優の、声を張り上げて緊張感を高める言い回しや、ところ狭しと駆け巡る活劇パワーに圧倒された。BBCラジオ4の芸術評論番組「サタデー・レビュー」では、数人のコメンテーターが「イギリス人とはまったく違う言葉のリズムとスピード感あふれるアクション」に感嘆し、大詰め殺戮場面の立ち廻りのうまさに興奮した。「ファイトがすごくカッコいい」と、終演後に数人の観客も言う。

また平幹二郎のクローディアスが罪悪感にかられ、腰布だけで水をかぶりながら祈る儀礼的意味は十分に伝わった。「壮麗な平が、罪と欲望の間で苦悩する痛々しさと

弱さが心に沁み通る」(デイリー・テレグラフ)との評も。

さらには王位を継ぐフォーティンbras(内田健司)がひ弱な若者に造形されていることも、危うい将来が透けて見えるように注目された。デイリー・テレグラフはちょっと斜に見て「ウイットに富んだ場面」という。そこにあるのは、貧民の生活など意に介さない現代青年の傲慢さとも見て取れる。

「『ハムレット』を昔の日本人はどう見たか、また現代の我々がどうとらえているかを織り交ぜたい。そうすればこの驚異的作家の与えた衝撃を知り、同時に日本がいかにして今日の姿に進化したかを考察することができるのです」と蜷川はフィナンシャル・タイムズ(FT)の記者に語っている。つまり蜷川初期の日本的演出は日本人に分かりやすくするためだったが、時を経て、今回の「日本の原風景」は、今の日本、したがって「今の自分」を知るためのモチーフということになる。



蜷川演出の2本を紹介するパンフレット

優しい遊び心に満ちた演出『海辺のカフカ』

さてもう一つの『海辺のカフカ』は、通常の蜷川演劇とは違う“環境”にあった。蜷川ファンのみならず、イギリスでも空前のベストセラー作家である村上春樹のファンも押し寄せたからだ。父の呪いから逃げ、家出する15歳の少年カフカ(古畑新之)の話と、猫と話せる変わった老人ナカタ(木場勝己)の話がさまざまな状況を経て一つにつながっていく。といっても「村上ワールドはリアリズムよりファンタジー」と思って笑っていると、会話の中にハッとする真理が見えてきたりとめまぐるしい。

蜷川は部屋や森やトラックや図書館をはじめ込んだいくつもの大きな透明なハコを舞台上に動かし続けて、夢のように流れる物語の迷路を具象化し、リアルかつシュールな演技空間を作ってしまった。

このようにせりふに合わせて指定の位置にびたりとハコを動かすのは大仕事だ。複数の劇評がその労力を称えていた。黒衣装のスタッフが、蜷川の指示でロンドンで初めてカーテンコールに出た時は万雷の拍手が来た。

「すごいデザインだね」「小説よりずっと分かりやすい」「原作は読んでいないけれど、

読みたくなかった」「小説は読んだ。キャストがみんないいね」「セットがいい。あれを動かし続けるスタッフはすごいね」すべて観客から聞いた言葉だ。

新聞は絶賛評を贈った。「寂しさやほかなさや、思いがけぬ巡り合いの大切さがにじみ出ている。古畑のカフカと木場のナカタはいじらしいほど感動的だ」(FT)、「深い森から都会のネオン地獄、話す猫からヘーゲルを引用する売春婦まで抱え込んで、夢と現実の均衡が取れた画期的な世界を築いた」(ガーディアン)。さらに目についた評価は、「最良のキャストの中でも特筆すべきは、説得力のある(ほど猫らしい演技を見せた)猫たちだ(土井睦子、マメ山田、塚本幸男)」(デイリー・テレグラフ)。

実にこの猫たちが大当たりで、出てくる

度に笑いが起きた。のっそりした大きなオス猫、子猫時代の事故で脳に障害を持つチビ猫、そしてちょっとセクシーなメス猫のミミ。ミミはプッチーニのオペラ『ラ・ボエーム』の薄幸の娘、お針子ミミにひっかけているから笑わせる。第1部の幕切れに有名なミミのアリア「私の名はミミ」のメロディーが流れてさらにおかしさを盛り上げた。

デイリー・テレグラフには「猫嫌いや明快な筋を好む人は別だけれど、それ以外の誰もがこの優しい遊び心に満ちた演出に心を奪われてしまうだろう」とも。笑いの中に悲哀や寂寥感や慈愛の心を姿かたちでわからせる蜷川の表現法は、イギリスでも充分理解されたのである。

チケット発売中

蜷川幸雄80周年記念作品『海辺のカフカ』

9.17(木)~10.4(日) 彩の国さいたま芸術劇場 大ホール
 [原作]村上春樹 [脚本]フランク・ギャラティ [演出]蜷川幸雄
 [出演]宮沢りえ 藤木直人 古畑新之 鈴木杏 柿澤勇人 高橋 努 鳥山昌克 木場勝己ほか
 チケット(税込) 一般・メンバーズ S席10,800円/A席8,700円
 ※本公演はメンバーズ料金の設定はございません。

	9/17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	10/1	2	3	4	
	木	金	土	日	月	祝	祝	祝	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日
13:30	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
14:00	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
18:30	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

シェイクスピアの最初期の喜劇である『ヴェローナの二紳士』は、あまり知られていない作品ですし、紳士の一人ヴァレンタインが突如、山賊の親玉になるなど、〈ご都合主義〉な展開が気になるかもしれません(笑)。でも(W.シェイクスピアの故郷でロイヤル・シェイクスピア・シアターを擁する)ストラットフォード・アポン・エイヴォンでも2度ほど観ているんですけど、どちらの舞台も本当に面白かった。この作品は、この〈伏線なしの強引な展開〉が楽しめる、奇跡のような芝居になるんだと感じました。

そして、あらためてこの戯曲に触れて思うのは、若いシェイクスピアの才能が光る、きらめくせりふの多さです。私が好きなのは、男装したジュリアが恋人プロテーアスの従者になってしまい「こんな使いをする女がこの世に何人いるだろう？」と嘆くせりふ。かつて愛を誓ってジュリアが渡した指輪を、プロテーアスがシルヴィアへ贈る使いに出されてしまう……好きな人が別の女性のほうを向いている切ない女の子の心情が出ていて、現代のお客様にも大いに共感いただける場面じゃないかと思います。

シェイクスピアの原点を感じる

ジュリアは、このあとのシェイクスピア作品にも登場する、男装する女性キャラクター第一号。『十二夜』のヴァイオラにも通じる、勇気があって、同時に繊細で傷つきやすいという女性像がもうこの作品で生まれているわけです。この作品は脇のキャラクターも楽しい。例えばランスとスピードという面白い従者が出てきます。片方は天然ボケ、もう片方は頭の回転が速い。『間違いの喜劇』や『じゃじゃ馬馴らし』に出てくる道化役の先取りでしょう。

実はこれが、私が「彩の国シェイクスピア・シリーズ」で翻訳し始めて30本目。『ハムレット』も『オセロー』も『十二夜』も、あらゆる悲劇と喜劇を訳したあとで初期作品に戻ってきたわけです。私の場合は蜷川さんのために訳していますから、年代順ではなく、上演順に手掛けてきた。そうして初期作品を訳すと「あれ、このやり取りは『ヴェニス商人』に出てくるな、『ロミオとジュリエット』のジュリエットと乳母の会話に似ているな」など、発見があるのがとても楽しい。その点では、翻訳家・松岡は得したなと思っています。



溝端淳平



三浦涼介



高橋光臣



月川悠貴

The Two Gentlemen of Verona

オールメールの
ここを
楽しむ!

これまでのオールメール・シリーズでは、新たなシェイクスピア作品の面白さを発見してもらいました。例えば『じゃじゃ馬馴らし』。気が強くて扱いにくい女性キャタリーナを男性がやりこめていく様子はDVにも見えてしまい、難しい演目です。どんなに屈強な女優さんがやっても、そこが生々しくなってしまう。けれどもオールメールでは〈キャラクターは女でも演じているのは男〉という二重性を利用し、カラッとした喜劇として仕上がる。パタン！と倒れてベチコートの中まで見えたりしても、目をそらさずにしっかり見られますすね(笑)。『お気に召すまま』の田舎娘の役なんて、女優さんでやると「ブスになってください」って気の毒なところがあるけれども、男の子がやるとほっぺたを真っ赤にして、思い切りできる。演技も見かけもデフォルメできて、面白さが拡大されて見える楽しさがありますよね。

今回は、りりしい溝端淳平さんがジュリア役。男優が女性を演じ、その女性が男装するという二重の仕掛けになるところは、見どころでしょう。もう一人の女性シルヴィアは〈文句のつけようがない美女〉。そんな役を、これまで同シリーズで数々の美人を演じてきた月川悠貴さんが演じます。このように蜷川版『ヴェローナの二紳士』では、表現の難度の高い女性役、そして「待ってました!」とかけ声を掛けたい女性役と、質の違う二種類の女形が見られるのが楽しみですね。そんな美女たちと、三浦涼介さんと高橋光臣さんが演じる青年たちとの生き生きとしたやりとりにも期待しています。

松岡和子(翻訳)に聞く

若きシェイクスピアの紡ぐ “きらめくせりふを楽しむ舞台”

蜷川幸雄演出・監修のもと、シェイクスピア戯曲全37作品の上演を目指す「彩の国シェイクスピア・シリーズ」。同シリーズをずっと翻訳してきた松岡和子が見た、最新作のみどころを聞いた。

取材・文 ● 川添史子

STORY

ヴェローナの青年ヴァレンタイン(高橋光臣)は、修学のためにやってきたミラノで、大公(横田栄司)の娘シルヴィア(月川悠貴)と恋に落ち、駆け落ちの約束をする。ところが、あとからやってきた幼馴染みのプロテーアス(三浦涼介)もまた、彼女に一目惚れ。さらにそこへ、故郷から恋人プロテーアスを追ってきたジュリア(溝端淳平)までもが現れる。道中、身の安全を守るためにセバスチャンと名乗って男装していたジュリアは、あろうことか恋人に従者として雇われてしまい……。

チケット発売中

彩の国シェイクスピア・シリーズ第31弾『ヴェローナの二紳士』

10.12(月・祝)~31(土) 彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

[演出] 蜷川幸雄 [作] W.シェイクスピア [翻訳] 松岡和子

[出演] 溝端淳平、三浦涼介、高橋光臣、月川悠貴
正名僕蔵、横田栄司、大石継太、岡田 正、河内大和 ほか

チケット(税込)

一般 S席9,000円 A席7,000円 B席5,000円

メンバーズ S席8,100円 A席6,300円 B席4,500円

U-25*(B席対象)2,000円 *U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。

	10/12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
14:00	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
18:30	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

★印は映像収録のため場内にカメラを設置いたします。

「イヨネスコの『犀』なんて聞いたこともない」と引き気味のみなさん、どうかご安心を。イヨネスコの戯曲の中でも「よく知られている方」と認識されているこの作品、フランスでは1960年にジャン＝ルイ・パローの主演・演出で初演されて以来、なんと2004年まで（少なくとも主要劇場では）一度も上演されたことがなかったそう。昨年、その2004年に始まるパリ市立劇場での上演を手がけた同劇場芸術監督エマニュエル・ドゥマルシー＝モタ氏にインタビューした際に、演出も担った氏がそう言っていた。この発言には、インタビュアーより先に通訳さんが驚愕して、何度か聞き直してくれたほど。本国フランスでそういう状況だったのなら、観たことがなくても恥じることはない。おかげで肩の力が抜け、かなり気が楽になった。

数十年間も上演がなかったのは、「イヨ

ネスコは時代遅れの作家とみなされていたから」とドゥマルシー＝モタ氏は語っていたけれど、そう感じられていた時代はなんと幸福だったことだろうと、21世紀の現在を生きる身としては、嘆ぜざるを得ない。昨年パリで再演された『犀』は、今、世界中で顕著になりつつある偏った政治状況と世相の流れを如実に反映した、実にアクチュアルな寓話劇になっていた。

不条理劇の中でも 明快な展開を持つ『犀』

主人公はベランジェという、あまりうだつの上がない男。有能を自認する親友ジャンに容赦なくやり込められても、さして怒ることもない代わりに、奮起も落胆もしない。そんないたってマイペース・タイプの彼のまわりで、次々と異変が起き

る。まずはジャンとカフェにいるところへ、地響きと埃を巻き上げて犀が走り過ぎる。人々は驚き騒ぎ半信半疑で論争を始めるが、被害は犀に踏まれた猫一匹に留まる【一幕】。

翌朝ベランジェが出勤すると、職場は昨日の犀騒動は何だったのかという話で持ちきり。そこへ出勤してこない同僚ブフの妻が駆け込んでくる。彼女は家からここまで犀に追いかけられたといい、その犀が職場の建物を直撃し、階段が破壊されて、階上にある職場はパニックとなる。ブフの妻は、聞こえてくる犀の鳴き声が夫本人であると言いつつ、犀の背に飛び乗り去って行く。階上に孤立した人々は消防署に救助を要請しようとするが、電話がなかなかつながらない。どうやら街中いたるところに、

11月、パリから日本に上陸する話題作を先取りしてご紹介する。作品は、不条理演劇を代表する作家イヨネスコの傑作『犀』だ。フランスの気鋭演出家によってスタイリッシュに仕上げられた〈問題作〉は、現代社会に鋭く刺さる、必見の舞台となりそうだ。

取材・文 ● 伊達なつめ (演劇ジャーナリスト) Photo © Jean-Louis FERNANDEZ

パリ市立劇場



『犀』

“RHINOCÉROS” Théâtre de la Ville, Paris

開を持つ戯曲だ。

人間の内面を注視する 深度を持つ舞台

11月に来日するドゥマルシー＝モタ版は、2004年の初演後、2011年にリニューアル上演され、ニューヨーク、ロンドン、モスクワなど世界中を巡演して高い評価を得ている。全体に不穏な空気が通底する、シンプルでスタイリッシュな舞台で、『犀』は一幕では音と照明と人々の視線で、二幕では音と震動に加えてオフィスの床が実際に傾き、人々が右往左往するスペクタクルによってその存在を実感させ、三幕に至って、ついに可視化する。2011年の上演から、冒頭にイヨネスコの小説『孤独な男』からのモノローグを付加するようになったそうで、単なるイデオロギーの偏向や集団ヒステ

犀が出没しているらしい。

救助されたベランジェは、親友ジャンの家を訪れる。ジャンは顔色も声の調子も悪そうで、ベランジェと話すうちにもみろみる変容してゆき、ついに犀になってしまう。助けを求めようにも、周囲の人々はすでにみな犀だ【二幕】。

必死に逃げ出した後、家に引きこもるベランジェを心配して、同僚のデュダールとデイジーが、相次いで来訪する。いまや外界は犀だらけ。この二人は、残されたわずかな人間だったが……【三幕】。

イヨネスコが、1930年代に父の母国ルーマニアで、ファシズムの台頭に接した体験をもとに書いたとされる三幕劇。『椅子』『授業』など抽象性の強い不条理劇が多い作家という印象があるけれど、『犀』は、むしろ具象的と言っていいほど、明快な展

開を持つ戯曲だ。リーの批判にとどまらず、この作品が人間の内面を注視する深度を持っていることを、観客により強く印象づける演出になっている。

とはいえ昨年6月にパリで観劇した際は、折しも欧州議会選挙で、フランスでも極右政党が最多得票を獲得したという結果が出た直後。水を打ったようにシンとして真剣に舞台に集中していた観客が、最後に熱い喝采を惜しまなかったのは、やはり、迷いを脱し「全員と対立して自分を守る！」と決意する、どこにでもいそうな普通の男ベランジェへの共感が、多かったように思う。

発売日 一般 8.29(土) メンバーズ 8.22(土)

パリ市立劇場『犀』 フランス語上演 / 日本語字幕付

11.21(土)開演19:00 22(日)・23(月・祝)開演15:00
彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【作】ウジェーヌ・イヨネスコ 【演出】エマニュエル・ドゥマルシー＝モタ
【出演】パリ市立劇場カンパニー

チケット(税込) 一般 S席6,000円 A席4,000円
U-25* S席4,000円 A席2,000円 / メンバーズ S席5,400円

*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。

ボワヴァン／ウバン／ラリユー 『En Piste —アン・ピスト』

Interview

ダニエル・ラリユー

歌と踊りを愛してきた “すべての”人々へオマージュを捧げる

ドミニク・ボワヴァン、パスカール・ウバン、ダニエル・ラリユー。
80年代、ヌーヴェル・ダンスを牽引した3人が
振り付け、踊る舞台が、11月に来日する。
50代、60代を迎え、ますます表現力が研ぎすまされる彼らが贈る
『En Piste —アン・ピスト』とはどんな作品か。
ダニエル・ラリユーにその創作の過程、内容を聞いた。

取材・文 ● 岡見さえ (舞踊批評家)

80年代、フランスで生まれたヌーヴェル・ダンスは、身体表現に映像、造形芸術を組み合わせてダンスを新しい芸術に進化させ、その創造性は現在へ受け継がれている。近年ヨーロッパでは当時のダンスを再演やアーカイヴィングで歴史化する動きがあり、彩の国さいたま芸術劇場も2013年にマチルド・モニエが1984年に初演した『ピュディック・アシッド』、2014年にフィリップ・ドゥクフレが30年間の振付作品を再構成した『パノラマ』を上演したのは記憶に新しい。今秋『En Piste』を上演するラリユー、ボワヴァン、ウバンも、まさにこの世代の振付家／ダンサーだが、本作は若いダンサーを起用した再演ではなく、30年間一線を走り続け、50代を迎えた彼ら3人が自ら振り付け踊る新作。このユニークなコラボレーションはどのように始まり、進展したのだろうか？

「直接のきっかけは、2012年に30周年

を迎えた私のカンパニー、アストラカンのお祝いに踊ろうと3人が再集結したこと。1984年に私の振付作品『皮と骨』で一緒に踊って以来、私たちの軌跡はしばしば交差し、トゥール国立振付センターの芸術監督時代には私はボワヴァン振付『カルメン』に出演し、ほかにも3人で短い作品を踊ってきました。『En Piste』は、その自然な流れにあります。3人が作品全体を構想し、曲にそれぞれ振り付けました」

『En Piste』の特色は、初めから終わりまで全16曲のシャンソンが途切れなく流れ、3人が踊り続けることだ。エディット・ピアフ、バルバラ、レオ・フェレ、セルジュ・ゲンズブールetc……。美しく親しみやすいメロディーにのせ、詩的な言葉遊びを駆使して愛や人生の喜怒哀楽を歌い、時には同時代の社会問題を糾弾するこれらのシャンソンは、どのように選曲したのだろうか？

「3人が以前に短く踊った曲、踊りたかった曲、青春時代のヒット曲も使いました。歌は時代を映し、特に子どもや若者には初めての感情の高揚を刻みこむ。私たちが選んだ歌は80年代以前、つまり1968年の5月革命、性の革命、女性の権利やマイノリティーの闘い、社会の不正などの出来事が私たちの青春に影響を与えた時代のもです。あの時代を生きた私たちには、“他者の権利を尊重する意志”の番人のようなところがあるのです」

簡素な舞台上、3人は曲ごとにさりげない衣裳や照明の変化で新たなムードを立ち上げ、時に軽やかに時に重厚に、ソロ、デュ



ダニエル・ラリユー

Daniel Larrieu

マルセイユ生まれ。1980年代初頭より振付家／ダンサーとして活動開始、1982年に振付の独自性が評価されパピョレ国際振付コンクール賞受賞。1994年〜2002年トゥール国立振付センター芸術監督として多彩な作品を創作してきた。1989年と1996年に来日公演している。プールの中で踊る『Waterproof—ウォーターブルーフ』、流水の上で踊る『Ice Dream—アイスドリーム』など劇場以外の“場”を使うことも多い。社会に対して鋭いまなざしを向けつつ大胆な試みに挑戦し続けている。

オ、トリオを展開し、驚くほど多彩な身体性を次々と見せ、踊る。舞踊とは常に音楽とともにあるが、「音」に留まらず、言葉であり明確なメッセージを伝える「歌」で踊る面白さ、そして言葉と動きとの関係はどのようなものだろうか？

「多種多様な動作を構成することは、楽しい仕事でした。言葉とのなめらかで繊細な関係はフランス語の意味や詩情と結びついています。フランス語を解さない人はバラエティーに富んだ身振りのありかたを見るでしょう。そこにも詩情が存在することを望んでいます。ムーヴメントは、言葉や言葉を取り巻くもの、または音楽から選択され、反復されています。つまり身振りは言葉に影響され、言葉もまた身振りとして作用しているのです」

まさにラリユーが長年探求する「動作のシャンソン」の実践だが、ボワヴァンとつながりのあるバロック・ダンスの専門家、ベアトリス・マサンの協力で、作品にはまた異なる次元の身体性が導入されている。「彼女はレオ・フェレのシャンソン《彼はスケートが上手い》》にのせて歩行の原則に基づく振付をしてくれました。それは「動作のシャンソン」の別の取り組み、言葉とリズムとの関係の別の形体、空間に存在する

新しい方法を示しています」

空間と身体の詩的かつ創造的な関係性も、ラリユーのダンスの特徴だ。プールを舞台にした瞬間ごとに形を変える水とのダンス『Waterproof—ウォーターブルーフ』(1986)、温暖化で消滅するグリーンランドの氷山の上で踊るソロ『Ice Dream—アイスドリーム』(2010)など、ラリユーは驚くべき空間をダンスの場を選んできた。ではこの作品で何もない舞台を選んだ理由は？

「日本の舞台に氷山を持ち込むのも、水浸しも難しいでしょ？ でもそうした経験からは、動作は様々な空間でのダンスの経験すべてに培われ、変化すると学びました。“ピスト”はフランス語で、サーカスの舞台のこと。抽象的で簡素なこの円形空間は、光を跳ね返す鏡の絨毯のように一種の魔術的感覚をダンスに与えてくれるのです」

詩的な美しさやユーモアを湛えながらも自然で銜いのない『En Piste』は、いつの時代も歌を、踊りを愛してきたすべての人々へのオマージュであり、分断され他者への寛容を失いつつある社会へのメッセージでもあるようだ。身体が歌い言葉が踊る——経験を重ねてより自由により深まる3人のダンスを、ぜひあなたも一緒に！



Photo©Frank Boulanger

発売日 一般 8.1(土) メンバース 7.25(土)

ボワヴァン／ウバン／ラリユー 『En Piste —アン・ピスト』

11.6(金)開演19:00 7(土)開演15:00

彩の国さいたま芸術劇場 小ホール

[構成・振付・出演]ドミニク・ボワヴァン、パスカール・ウバン、ダニエル・ラリユー

チケット(税込) 全席指定

一般 4,000円/U-25* 2,000円/メンバース 3,600円

*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。
※演出の都合により、開演時間に遅れますと入場をお待ちいただく場合がございます。予めご了承ください。



Photo © Takashi Arai 提供: Japan Foundation

メキシコ発

グラミー賞ノミネート4回の打楽器アンサンブル

タンブッコ・パーカッション・アンサンブル

メキシコから凄腕打楽器プレイヤー4人組がやってくる! 打楽器の可能性に挑戦し続ける「タンブッコ・パーカッション・アンサンブル」。聴衆の目も耳も釘づけにするスーパープレイを繰り広げる彼らは、ラテン・アメリカの音楽はもちろん、日本人作曲家の作品を積極的に演奏し、子どもたちへのワークショップにも熱心に取り組む。その根底にあるのは「多くの人々に打楽器を楽しんでもらいたい」という思い。そんな彼らの魅力に迫る。

文 ● 楠瀬寿賀子 (音楽ライター)



Photo © Alejandra Barragán

多くの作曲家に新作を委嘱
打楽器の世界を広げるタンブッコ

打楽器、と一口に言っても、その種類は膨大だ。打つ、擦る、振るなど、ある意味ではそこから音が出るものならなんでも楽器になりうるわけで、際限がない、とも言える。打楽器アンサンブルは世界中でたくさん活動しているが、その音楽性もじつに様々だ。同じ作品を演奏してもどれ一つとして同じものはない。地域性もあるだろうし、同じ名前の楽器を使ってもそこから引き出す音の違いは大きい。作品によっては、例えば「金属、木質、皮面」といった指示のみのもの(後述の《マリンバ・スピリチュアル》など)もあり、その選択が演奏家に委ねられることも多い。演奏家はその創造性を十分に発揮できるジャンルでもあり、またそれが試されるフィールドでもあ

るということだ。

タンブッコ・パーカッション・アンサンブルは、1993年に多様な個性をもった4人の打楽器奏者によってメキシコで結成された。それ以来20年以上にわたる世界各地での数々の公演、そしてグラミー賞にノミネートされた盤を含む8枚のアルバムの録音をとおり、打楽器アンサンブルとしての独自の存在感に注目が集まっている。

タンブッコは何よりも、打楽器から生み出される音楽の新たな可能性を広げることにも力を注ぎ、多くの作曲家に作品を委嘱してきた。レパートリーには、マリンバ奏者安倍圭子の作品をはじめ、武満徹、近藤謙、西村朗、松尾祐孝など日本の作曲家の作品も多く、コンサートや録音で海外にも活発に発信している。今回演奏される三木稔の

《マリンバ・スピリチュアル》は、世界の打楽器界でも重要なレパートリーとなっているが、タンブッコも積極的にプログラムに加え、録音も行っている。それらの功績によって2011年に国際交流基金賞を授与されて初来日し、日本でもその名前が知られることとなった。2012年には4人の日本の若手作曲家がメキシコでの滞在を経て作品を創作するプロジェクトを実施し、メキシコシティにて世界初演、その後日本ツアーで日本初演を行っている。

ワークショップでは
台所道具が打楽器に!

日本の作品への高い関心に加えて、若い作曲家や演奏家、そして聴衆を育てることも熱心に取り組む。「マスタークラスやワークショップを行うことは自分たちの

タンブッコ・パーカッション・アンサンブル
Tambuco Percussion Ensemble

1993年結成。数々の公演とレコーディングを通じ、打楽器作品の膨大なレパートリーを展開、打楽器アンサンブルとしての高い評価を確立。グラミー賞へ4回のノミネート。2011年度国際交流基金賞を受賞。2013年来日ツアーを実施、「現代の音楽」「題名のない音楽会」に登場。生命を持った無限大な音、リズム、豊かなパフォーマンスが魅力。世界中で公演を行い、これまでに多数のCDをリリース。

チケット発売中

タンブッコ・パーカッション・アンサンブル

9.26(土)開演15:00
彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール

[曲目]
ライヒ: 木片の音楽
J.S. バッハ: 《フーガの技法》より
ホルヘ・カミルアガ: ちびっこコングのための四重奏曲
三木 稔: マリンバ・スピリチュアル
ミゲル・ゴンザレス: タンブッコのプレリアス ほか

チケット(税込) 全席指定 一般 3,500円
U-25* 1,500円/メンバーズ 3,200円

*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。
入場時に身分証明書を提示ください。

[深谷公演]

タンブッコ in セツ梅酒造跡

9.27(日)開演13:00/16:00 ※公演時間約1時間を予定
セツ梅酒造跡 東蔵ホール(深谷市)

[曲目]
ポール・バーカー: 石の歌、石の踊り
リカルド・ガヤルド: Sake Music (for sake barrels) (新作初演)
ティエリー・デュ・メイ: テーブルの音楽 ほか

チケット(税込) 全席自由 一般 1,500円/小・中学生 1,000円



Photo © Alejandra Barragán

と9などが演奏される。マリンバ4台でバッハの旋律がどのような音楽を織りあげていくのか、マリンバを得意としているタンブッコだからこそその期待は大きい。

酒蔵だったホールで
《Sake Music》
場所を生かした選曲も楽しみ

古い建物が数多く残されている深谷市の中でも約300年の歴史を持つ「セツ梅酒造」。その跡地にある酒蔵をリノベーションした「東蔵ホール」での、埼玉オリジナルのコンサートも楽しみだ。趣きのある建物の魅力を活かしての、酒樽を打楽器にしたリカルドの新作《Sake Music》や、彼らのおちゃめなパフォーマンスも楽しめる《テーブルの音楽》、そして、両手に持った石を打ち合わせたりなどして奏でる、大きな自然の響きに包まれる《石の歌、石の踊り》も、この場所ならではの空間、この場所かぎりの豊かな時間をもたらしてくれるだろう。

活動の中でとても重要だ」というリーダーのリカルドの言葉どおり、今回も小学生以上なら誰でも参加できる「フロム・ザ・キッチン! ~キッチン道具のアンサンブル」と題されたなんとも楽しそうなワークショップが予定されている。特に子どもたちが受け身でなく音楽を味わう経験をつくとともに、より多くの人びとに打楽器のパフォーマンスを楽しんでもらいたい、という彼らの熱意が伝わってくる。

4人が繰り広げる
圧巻のバルスとリズム

タンブッコは自らの本拠であるメキシコをはじめ、ラテン・アメリカの音楽を世界中の人びとに聴いてもらうことにも積極的だ。埼玉での2つの公演でも、メキ



Photo © Alejandra Barragán

彩の国さいたま芸術劇場公演では、このほかバッハの《フーガの技法》よりコントラプンクトゥス1

文◎NHK交響楽団首席オーボエ奏者 茂木大輔

もぎぎ流 「ラフ3」&「ベト7」 の楽しみ方

毎年恒例、NHK交響楽団による浦和公演。今年、ラフマニノフのピアノ協奏曲第3番とベートーヴェンの交響曲第7番という名曲2作をお贈りする。かたや20世紀初めのロシア、かたや19世紀初めのウィーンという作曲された国も時代も全く異なる、しかし音楽家や音楽ファンが愛してやまないこの2曲について、エッセイストとしても活躍する“もぎぎ先生”ことNHK交響楽団首席オーボエ奏者・茂木大輔氏が、音楽家ならではの視点で、曲の極意を解き明かす！

NHK交響楽団

下野竜也(指揮) 清水和音(ピアノ)



下野竜也 Tatsuya Shimono 指揮

1969年生まれ。2000年東京国際音楽コンクール優勝と齋藤秀雄賞受賞、2001年ブザンソン国際指揮者コンクールの優勝で一躍脚光を浴びる。2006年に読売日本交響楽団の初代正指揮者、2013年には同団首席客演指揮者に就任。2011年から広島ウインドオーケストラ音楽監督、2014年から京都市交響楽団常任客演指揮者も務める。国内外での活躍も目覚ましく、芸術選奨文部科学大臣賞など受賞多数。上野学園大学音楽学部教授。



NHK交響楽団 NHK Symphony Orchestra, Tokyo

1926年にプロ・オーケストラとして結成された新交響楽団が、日本交響楽団の名称を経て、1951年にNHK交響楽団と改称。今日に至るまで、カラヤン、アンセルメ、マタチッチなど世界の一流指揮者を次々と招聘、また、話題のソリストたちと共演し、歴史的な名演を残している。2013年8月にはザルツブルク音楽祭に初出演するなど、その活動ぶりと演奏は国際的にも高い評価を得ている。2015年9月から、パヴォ・ヤルヴィが首席指揮者に就任する。

活躍度も情熱度も第2番以上！ ラフマニノフのピアノ協奏曲第3番

11月にNHK交響楽団はさいたま市文化センターに伺います。聴きにきてくださいね(←いきなりの宣伝♥)。

下野竜也さんの指揮、清水和音さんのピアノという現代日本の至宝共演で、ラフマニノフの《ピアノ協奏曲第3番》とベートーヴェンの《交響曲第7番》を演奏する予定です。

前半のラフマニノフの《ピアノ協奏曲第3番》、「なんだ〜、《第2番》じゃないのか〜」とがっかりする必要はないのですよ。確かに《第2番》はとても有名で、「シンプルで、凄く解りやすい、旋律が美しい、ロシアの哀愁がある」という大きな魅力がある作品です。

しか〜し！ 今回のソリストの清水さんとお話した時に「(《第2番》は)ピアノはオケをずっと伴奏している。自由に弾けるのは一人のところだけ」とおっしゃっていたように、曲は素晴らしいが、伴奏ばかりしていてソリストの演奏を存分に楽しめるというわけにはいかないのが《第2番》。

それに対してこの《第3番》は、ピアノ

独奏はその技術、サウンド、メランコリーや情熱などを、もう、これでもかというほど表現できるばかりか、オーケストラにも《第2番》をはるかに上回るやりがいを与えられているのです。ある時は長くピアノが主役に、またオケの全体やソロと混然一体になったり、オーケストラをダイナミックに、時には繊細に伴奏したり、ソリストとオケの関係は《第2番》よりも飛躍的に幅広い可能性を持っています。

もう一つの魅力は、アメリカ演奏旅行を意識したと思われる、豊かなメロディと、とてもモダンなサウンドです。第1楽章だけでも魅力的な旋律は湯水のように出て来ますが、第2楽章の冒頭、オーボエ・ソロで示される熱いメロディは、まるでハリウッド映画のよう……と書いたら、なんとこの曲『シャイン』という映画で使われていたそうですね！ 第3楽章では、管楽器に書かれた装飾的なソロがあまりにも高速なため、全く異例なことに「ad. lib.」(現場合わせ。やってもやらなくてもいい?)という指示さえもがあります(カッコイイので、意地でも吹きますけどね!)。小太鼓(ミリタリー・ドラム)の登場など、ショスタコーヴィチやプロコフィエフにもつながる、ロシア20世紀音楽の偉大な歴史を思



清水和音 Kazune Shimizu ピアノ

完璧なまでの高い技巧と美しい弱音、豊かな音楽性を兼ね備えた日本を代表するピアニスト。ジュネーブ音楽院にて、ルイ・ヒルトブラン氏に師事。1981年、弱冠20歳で、ロン＝ティボー国際コンクール・ピアノ部門で優勝、あわせてリサイタル賞を受賞した。これまでに、国内外の数々の著名オーケストラ・指揮者と共演し広く活躍し、いずれも高い評価を得ている。室内楽の分野でも活躍し、共演者から厚い信頼を寄せられている。東京音楽大学教授。

わせるオーケストレーションは、《第2番》の重厚さに、華麗で変化に富んだ魅力をつけ加えたと言えるでしょう。

ホルンとティンパニの甲高い音 そして繰り返されるリズムに注目！ ベートーヴェンの交響曲第7番

さて、後半は「ベト7」です。

最初は全員フォルテで「じゃん！」と和音をやっている中から、オーボエがピアノで残像のようにまっすぐ引き延ばされて、いろんな楽器に受け継がれていく間に、ギリシア建築の柱のように和音が幾つも打たれます。そのあと、密かに始まる上昇音階が巨大な爆発に至って、またオーボエ・ソロで美しい旋律が……って、もう、結構なドラマになっちゃってますけど……まだまだこれはイントロなんですねえ。このイントロは、フルートとオーボエだけの「ミ」の音に集約されて消えていき(音程難しっ!)、そのミが、小さく8分の6拍子で「みーみみっ、みーみみっ……(長・短・短)」と繰り返すのが合図でテンポが速くなり、一旦停止！ ついにあのホルンの絶叫する名場面(第1主題)に突入します。

この曲では、当時極めて短い(甲高い)楽器であったA(イ調)管のホルンが指定されていて、圧倒的にホルンの活躍が目立ちます(そのぶん、トランペットは地味に抑えられています)。当時まだホルンはロータリー(音を変える装置)がなく、和音は得意だが旋律が自由には吹けなかった楽器ですので、旋律的な主題をまるごとホルンに吹かせるというのはベートーヴェンの大きな挑戦でした。特に第4楽章で血管キレそうに絶叫するホルンは本当に快感を呼びますよね。後世で、ブルックナー、マーラー、リヒャルト・シュトラウスなどが好んで用いたホルンによるカッコイイ旋律

は、ここに原点があると思います。

なお、甲高さはティンパニにも及んでいて、当時皮をいっぱい張って出る最高音はF(ファ)でしたが、この交響曲では第1、2、4楽章ではそのすぐ下のE(ミ)、第3楽章ではついに最高音F(ファ)が用いられています。

さて、そのホルンがカッコ良く吼えた第1主題が再現される時には、一時停止の中からオーボエが一人でのどかにそれを吹きます。「運命」にも同じような場面がありますが、1秒のスキもないガチガチな「運命」などに比べてこの《第7番》はベートーヴェンがずいぶん自由に、旋律や気分を優先して作曲しているように感じます。

実は、このホルンのテーマに含まれた「長・短・短(格)」(「たーた」というリズム)は、この交響曲の間中ずっとどこかに鳴っています。第2楽章でも最初の弦楽器(たんた、たんた)から楽章の終わりまでずっと同じように、第3楽章では中間部(トリオ)で「たーりーらっ!……」と繰り返されるメロディ(2番ホルンの低音ソロにも注目!)の中に「長・短・短」があり、フィナーレ(第4楽章)では最初から「たったかた!」と繰り返されるリズムが「長・短・短」です。さきほど、自由で旋律的と言いましたが、一方では、一つの小さなリズムから45分の大交響曲を作ってしまうという作曲上の高密度の集約性もベートーヴェンは追求していたんですね。

憂鬱で哀愁のあるラフマニノフ《ピアノ協奏曲第3番》と、ウィーン戦乱の世相を吹き飛ばす突風のようなベートーヴェン《交響曲第7番》、大きなコントラストのあるプログラムです。どうぞお楽しみに!

チケット発売中

NHK交響楽団 下野竜也(指揮) 清水和音(ピアノ)

11.8(日)開演16:00 さいたま市文化センター 大ホール

【曲目】
ラフマニノフ: ピアノ協奏曲第3番 二短調 作品30
ベートーヴェン: 交響曲第7番 イ長調 作品92

チケット(税込)
一般 S席6,500円 A席5,000円 B席4,000円
U-25*(B席対象)2,000円
メンバーズ S席 6,000円 A席4,500円 B席3,600円

*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。
※開演前15:25~15:40に、指揮者下野竜也氏による
プレコンサートトークを予定しております。

ピアノ・エトワール・シリーズ
アンコール! Vol.4

フランチェスコ・トリストアーノ

Interview

自作とバッハで 別次元の世界へ

2010年の「ピアノ・エトワール・シリーズ」に登場したフランチェスコ・トリストアーノが、5年ぶりに彩の国さいたま芸術劇場に帰ってくる! クラシックだけに収まらず、ジャンルを超えて活躍するアーティスト、トリストアーノの注目のリサイタルは、自作とバッハによる刺激的なプログラム。彼の多彩な感性の源について、そしてリサイタルのプログラム構成について、大いに語る。

取材・文◎高坂はる香 (音楽ライター)

Photo◎宮川舞子

バッハの音楽は自分の生活の一部

鋭敏な感性で新たな音楽を生み出し、クラシック、テクノなど幅広い音楽ファンを魅了しているフランチェスコ・トリストアーノ。ピアニストとして、また作曲家として現代の音楽シーンに新風を吹き込む彼が、5年ぶりに彩の国さいたま芸術劇場のステージに立つ。プログラムは、自作とJ.S.バッハを組み合わせた意欲的なものだ。「子どものころ、最初に習ったピアノの先生に“僕が弾きたいのは自分の曲とバッハだけなんだ!”と主張したことをよく覚えています(笑)。今回はまさにそれを実現したプログラムというわけです」

両親の趣味で家には常にさまざまな音楽が流れていて、「バッハやワーグ

ナーと同時に、ピンク・フロイド、ラヴィ・シャンカールなどたくさんの音楽を聴いて育った」という。ジャンルの概念なく多くの音楽に触れてきた彼だが、やはりJ.S.バッハの存在は特別だ。「物心ついて以来、バッハはずっと僕の生活の一部です。もしもバッハを取り上げられてしまったら、心に穴があいたように感じるでしょう。バッハの音楽は、一つの要素が変化しながら繰り返され、曲が終わっても無限に続いていくように思えます。バッハをはじめとする優れたバロック音楽には、トランス音楽やインド古典音楽に似たところがあります。ここ2年ほど、僕が自宅で唯一聴くCDは〈マタイ受難曲〉なのですが、これにはまさにトランスの傾向があると思いますね。あるテーマが現れ、

チケット発売中

ピアノ・エトワール・シリーズ アンコール! Vol. 4 フランチェスコ・トリストアーノ

11.29(日) 開演15:00

彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール

[曲目]

トリストアーノ: KYEOTP

J.S.バッハ: パルティータ第1番 変ロ長調 BWV 825

J.S.バッハ: パルティータ第6番 ホ短調 BWV 830

トリストアーノ: 主題と変奏(新作世界初演)

J.S.バッハ: パルティータ第2番 ハ短調 BWV 826

トリストアーノ: シャコンヌ(グラウンド・ベース)

チケット(税込)

一般 正面席4,000円 バルコニー席3,000円

U-25*(バルコニー席対象)1,500円

メンバーズ 3,600円

チケット発売中

ピアノ・エトワール・シリーズ 4公演セット券 (Vols.27~28、アンコール! Vols.4~5) ※9月4日まで販売

[Vol.27]ベンジャミン・グローヴナー

9.5(土)開演15:00

[曲目]J.S.バッハ(ブゾーニ編曲): シャコンヌ

フランク: 前奏曲、コラールとフーガ 短調

ラヴェル: クーブランの墓 ほか

[Vol.28]チョ・ソンジン

2016年 1.31(日)開演15:00

[曲目]ショパン: 24の前奏曲 作品28 ほか

[アンコール! Vol.5]福岡 洸太郎

2016年 2.20(土)開演15:00

[曲目]武満 徹: リタニ ほか

チケット(税込)

一般・メンバーズ 正面席12,500円 バルコニー席10,500円

U-25*(バルコニー席対象)4,500円

[Vol.27]1回券発売中

[Vol.28]1回券発売日 一般 9.5(土) メンバーズ 8.29(土)

※詳細はP.22。

各回 一般 正面席3,500円 バルコニー席2,500円

U-25*(バルコニー席対象)1,000円 メンバーズ 正面席 3,200円

*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。

フランチェスコ・トリストアーノ ピアノ

Francesco Tristano

2004年オレアン20世紀音楽国際ピアノ・コンクールで優勝し、ルクセンブルク・フィルハーモニーによりヨーロッパ・コンサートホール協会「ライジングスター」ネットワーク・アーティストに選出される。彩の国さいたま芸術劇場には2010年2月、ピアノ・エトワール・シリーズVol.12に出演。同年3月、ユニバーサル・クラシック&ジャズ(ドイツ)と専属契約を交わし、ソロ・アルバム『bachCage』『Long Walk』、アリス=紗良・オットとの『スキャンダル』をリリースしている。

たびたび戻ってくるのだけれど、それが前に一体いつ出てきたのかははっきりとわからない。そうして音楽を感じているうち、どこか遠くの別次元に入っていくのです」

“主題と変奏”で何を表現するか 20年の時を経て明確になった

今回プログラムの冒頭に据えられているのは、自作の〈KYEOTP〉。バッハのパルティータ第1番、第6番への導入となる即興的な作品だ。一方の終わりにもまた、パルティータ第2番からの流れを受けとめるような自作の〈シャコンヌ〉を置く。「音楽が徐々に発展し、再び始点に戻っていくようなアーチ型のストーリーを持つ」プログラムで、聴衆を別次元の世界に誘う。

その頂点である後半の冒頭に置かれるのは、世界初演となる〈主題と変奏〉。インタビューをした時点ではまだスケッチの段階で、この夏に完成させる予定で構想を練っている最中だと語っていた。

「一つのアイデアがそこかしこで多様に変化していく“主題と変奏”という形式は、最もすばらしく完璧な音楽の形だと思います。実は15歳のころ、この形式に取り組んだことがありました。未完成のその楽譜

は、ある引き出しにずっとしまっておりまして。今回、新たに取り組むにあたってこれを見返しています。もしかしたら一部を引用するかもしれません。20年かけて、“主題と変奏”という音楽を通して表現したいことがやっと明確になったわけです。ようやくみなさんに聴いていただける時が来ました」

トリストアーノには、そんな「引き出しにしまわれた音楽」がたくさんあるのだという。その中には、今回のようについに目の見るものも、そうでないものもある。それらは絶えず変化する彼の創造の断片として、引き出しの中で機が熟す時を待っている。

理知的に重ねた音は 時に想像を超える響きを生み出す

クラシック作品のピアノリサイタルにしても、電子楽器による自作のライブにしても、彼の演奏を聴いて常に圧倒されるのは、優れたセンスで鳴らされる音の魅力だ。音色や響きを自在に操り、ときにはピアノの内部奏法や木枠を叩くなどの手法を駆使して、斬新な音を生み出してゆく。彼のそんな自由な感性を養ったのは、やはり

幼少期の環境のようだ。

「子どものころ家にあったのはとても古い壊れかけのアップライトピアノで、何をしてもよかったので、いろいろな音を出してピアノと遊んでいました。小さな僕が、鍵盤の上を歩いている写真もありますよ(笑)。そうやって出てくる音がおもしろかったのだと思います。あとは、ピアノに加えてシンセサイザーも身近にあったので、両方の音を合わせるということも日常的でした。全ての音楽は当然“音”から成り立っているわけですが、理知をもって重ねられた音は、想像を超えるものを生み出すことがあります。そこには決まったレシビはありません。音と音のコントラストや干渉性が複雑に絡み合っています」

トリストアーノは彩の国さいたま芸術劇場音楽ホールの音響がとて気に入り、再訪を楽しみにしているというから、今回、そんな“音の探究”は極めて挑戦的なものとなるだろう。

ちなみに、日本を愛し、日本食にも精通する彼が今抱いている夢は、「バルセロナにラーメン店を開く」ことだそう。さいたまにもお気に入りのラーメン店があって、そこへの再訪も楽しみにしているらしい。

Report

レポート

テロ・サーリネン ワークショップ



Photo©Matron



講師プロフィール

テロ・サーリネン 振付家/ダンサー

Tero Saarinen

1985年にフィンランド国立バレエ団でダンサーとしてのキャリアをスタート。1988-1992年ソリストを務める。1996年に設立した「テロ・サーリネン・カンパニー」の活動に加え、バトシェバ舞踊団、リヨン・オペラ座バレエ団など、世界の著名なダンス・カンパニーやバレエ団から作品を委嘱されている。作品は国際的な評価を得ており、優れたダンサー、印象的な視覚効果、そしてしばしば採用されるライブ音楽との融合により、「トータル・アートワーク」として高く評価されている。

ビードを帯びてくる。身体が躍動してくるとすっかり緊張もほぐれたらしく、学生たちの表情から笑顔がこぼれたり開放的に。「もっとはっきりと、動く方向を強調しないと」「君が動きにきちんとアドレスを書いてくれないとメッセージが届かないよ！」など、分かりやすくチャーミングな言葉で、観客に届く表現方法のコツも指導。前半は通訳を介していたのが、徐々に言葉を必要とせず、身体でサーリネンと学生たちが陽気にコミュニケーションをとりはじめた場面も印象的だった。

トータル2時間、汗だくになりながらも終始、疲れを見せず生き生きと、素直に楽しそうに踊り続けた学生たち。レッスン後は熱心な質問も飛び交った。最後はサーリネンから、彼らの表現の力となるような言葉も贈られ、技術だけではなく、国籍や世代の差を越えた、踊りを介した心の交流の時間だったのだと伝わってきた。

北欧ダンスのトップを走る振付家テロ・サーリネン。彼が率いるカンパニーの来日公演の関連企画として、サーリネン本人を講師にむかえたワークショップが6月の数日間にわたって開かれた。取材で見学に入った最終日には、埼玉大学ダンス部のメンバーと他大学からの参加者計15名が参加。埼玉大学ダンス部は第27回全日本高校・大学ダンスフェスティバル創作コンクール部門大学の部で文部科学大臣賞を受賞するなど、腕に覚えのある実力派だ。会場となった彩の国さいたま芸術劇場の稽古場には、バレエや現代ダンスから舞踏、武道まで、さまざまな身体表現から独自の振付言語を生み出すサーリネンのテクニックを学ぼうという、意欲あふれる若者たちが集まった。

16歳でダンスを始めたというサーリネンは、バレエ学校時代とプロのダンサーとしてクラシックバレエを約10年間踊り、その後、他のダンススタイルを体得していったという。日本でも大野一雄の舞踏や、合気道も学んだとか。そんな自己紹介と「自分が大切だと思うことを伝えますので、道具のように使っただけならば」という言葉でレッスンはスタートした。

「地面から身体が生えているように」「地球のように大きな空間を感じながら動いて」など、大きな自然のエネルギーを身体の中に取り込むような動きでウォーミングアップ。一人ひとりに姿勢や身体の向き、視線の使い方などを丁寧に指導。学生たちは気持ち良さそうにのびのびと動く。ストレッチのような緩やかな動きが、徐々にダンスに見えてくるから不思議だ。

あっという間に1時間が過ぎ、短いブレイクを挟み、動きはス

Review

レビュー

DANCE

コンドルズ埼玉公演2015新作
『ストロベリーフィールズ』
5.30(土)・31(日) 彩の国さいたま芸術劇場 大ホール



Photo©HARU

海外研究から帰国した石淵聡が2年ぶりに復帰し、「君の瞳に恋してる」から、ビートルズ「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」まで、新旧メンバーが開放的かつ胸に沁み入るメロディで踊った今年のコンドルズ。幼稚園でのシブアなやりとり(?)をコミカルにまとめた寸劇、ヨガのポーズを使用した影絵、絵本のような映像作品など、あの手この手の要素を、これでもかと詰め込む手腕は健在だ。舞台上に広がるフィールドに登場したかかしの列、後半ではそれが十字架に変わり、劇場には爆撃音が響く――。近藤良平の祈るような佇まい、青い青い空がまぶしかった。

MUSIC

庄司紗矢香&ジャンルカ・カシオーリ
デュオ・リサイタル
5.24(日) 彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール



Photo©加藤英弘

庄司紗矢香とジャンルカ・カシオーリのデュオが、3年ぶりに彩の国さいたま芸術劇場に登場。深くじっくり歌い上げていく庄司と、幻想的な響きで彩るカシオーリによるモーツァルトは実にロマンティック。反対にベートーヴェンでは、まるでモーツァルト作品のような軽やかな響きを繰り広げた。集中度の高いプログラム前半を終え、後半のストラヴィンスキーとラヴェルはいきいきと躍動感あふれる音楽が鮮やかに展開。充実の演奏に大満足、と思ったら白眉はアンコールに。シュニトケとシルヴェストロフの旋律を紡ぐ澄みきった音色に心洗われた、極上のリサイタルだった。

DANCE

テロ・サーリネン・カンパニー
『MORPHED-モーフト』
6.20(土)・21(日) 彩の国さいたま芸術劇場 大ホール



Photo©Arnold Groeschel

白く発光する四角い床、それを囲む三方には太いロープがずらりとつり下げられている。ロープにダンサーたちが絡んだり、引っ張ったりするだけで舞台が“MORPHED (モーフト=変容)”し、生き物のように、常に表情を変化させていく。この強烈な空間と拮抗し、しっかりと支えたのは、エサ=ベッカ・サロネンのエモーショナルでドラマチックな旋律だ。そして何より存在感を見せたのは、約60分間出ずっぱりで踊り続けた、しなやかに動き続ける8人の屈強な男性ダンサーたち。ひとときも目を離せない、静かに熱い、エネルギーほとばしる舞台を見せてもらった。

MUSIC

埼玉会館ランチタイム・コンサート第29回
NHK交響楽団メンバーによるアンサンブル
6.19(金) 埼玉会館 大ホール



Photo©加藤英弘

NHK交響楽団アシスタント・コンサートマスター大宮臨太郎氏をはじめとするN響若手奏者による演奏会。普段クラシックを聴かない人にも楽しんでもらえるような室内楽活動を展開する彼らのプログラムは、童謡、映画音楽、ビートルズ・メドレーを経て、最後にクラシックに辿りつくというもの。ヴァイオリン2本による特別版《チャルダシュ》は、ヴィオラ坂口氏の大ジャンプが付いて客席は大盛り上がり。シューマンのピアノ五重奏曲では室内楽の華やかな響きを楽しんだ。終演後は奏者5人が会場出口に立ち、お客様とN響メンバーとの素敵な交流のひとつとなった。

Tickets チケット

発売中

彩の国さいたま芸術劇場シリーズ企画
「次代へ伝えたい名曲」第4回
福田進一 ギター・リサイタル
9.12(土)14:00 **音楽ホール**
[曲目]ソル: モーツァルトの《魔笛》による序奏と変奏曲
J.S.バッハ(福田進一編曲): シャコンヌ 二短調 BWV 1004/5
ウォルトン: 5つのバガテル
タレガ: アルハンブラの思い出、アラビア風奇想曲
ブリテン: ノクターナル(ダウランドの歌曲《来れ深き眠りよ》によるリフレクションズ)
マネン: 幻想ソナタ 作品A22
チケット(税込)
一般 正面席4,000円/バルコニー席3,000円
U-25*(バルコニー席対象)1,500円
メンバーズ 正面席3,600円

発売中

ピアノ・エトワール・シリーズ
【4公演セット券】
Vol.27 ベンジャミン・グローヴナー
アンコール! Vol.4 フランチェスコ・トリスターノ
Vol.28 チョ・ソンジン
アンコール! Vol.5 福間洸太郎
【1回券】
Vol.27 ベンジャミン・グローヴナー
アンコール! Vol.4 フランチェスコ・トリスターノ
👉 詳細はP.16-17

発売日 一般 9.5(土) メンバーズ 8.29(土)

発売中

ピアノ・エトワール・シリーズ
Vol.28 チョ・ソンジン (1回券)
2016年 1.31(日)15:00 **音楽ホール**
[曲目]モーツァルト: ロンド KV511
シューベルト: ピアノ・ソナタ第19番 D958
ショパン: 24の前奏曲 作品28
※当初発表した曲目から一部変更いたしました。何卒ご了承ください。
チケット(税込)
一般 正面席3,500円/バルコニー席2,500円
U-25*(バルコニー席対象)1,000円
メンバーズ 正面席3,200円

発売中

埼玉会館ランチタイム・コンサート第30回
北川 翔(バラライカ)& 大田智美(アコーディオン)
8.25(火)12:10(終演予定13:00) 埼玉会館 大ホール
[曲目]クニツベル: ポーリュシカ・ポーレ ほか
チケット(税込) 全席指定 1,000円

発売中

NHK交響楽団
下野竜也(指揮) 清水和音(ピアノ)
👉 詳細はP.14-15

発売中

タンブッコ・パーカッション・アンサンブル
👉 詳細はP.12-13

発売中

深谷公演
タンブッコ in セツ梅酒造跡
👉 詳細はP.12-13

発売中

マリア・ジョアン・ピリス
バルティウーラ・プロジェクト in 彩の国
〜若き俊英ゲーアンを迎えて〜
11.15(日)15:00 **音楽ホール**
[出演] マリア・ジョアン・ピリス(ピアノ)、
ナタナエル・ゲーアン(ピアノ)
[曲目] ベートーヴェン: ソナタ第31番(ピリス独奏)
ベートーヴェン: ソナタ第21番(ゲーアン演奏)
シューベルト: 幻想曲 へ短調 D940 ほか
※当初発表した曲目から一部変更いたしました。何卒ご了承ください。
チケット(税込)
一般 正面席6,500円/バルコニー席5,000円
U-25*(バルコニー席対象)2,500円
メンバーズ 正面席6,000円

発売中

彩の国さいたま芸術劇場シリーズ企画
「次代へ伝えたい名曲」第5回
今井信子 ヴィオラ・リサイタル
11.28(土)15:00 **音楽ホール**
[出演] 今井信子(ヴィオラ)、キム・ソヌク(ピアノ) ほか
[曲目] 野平一郎: 《トランスフォルマシオン》
バッハのシャコンヌ〜4台のヴィオラのために〜
武満 徹: 鳥が道に降りてきた
ブラームス: ヴィオラ・ソナタ第1番 ほか
チケット(税込)
一般 正面席4,000円/バルコニー席3,000円
U-25*(バルコニー席対象)1,500円
メンバーズ 正面席3,600円

発売日 一般 9.5(土) メンバーズ 8.29(土)

発売中

彩の国さいたま芸術劇場シリーズ企画
「次代へ伝えたい名曲」第5回
今井信子 ヴィオラ・リサイタル
11.28(土)15:00 **音楽ホール**
[出演] 今井信子(ヴィオラ)、キム・ソヌク(ピアノ) ほか
[曲目] 野平一郎: 《トランスフォルマシオン》
バッハのシャコンヌ〜4台のヴィオラのために〜
武満 徹: 鳥が道に降りてきた
ブラームス: ヴィオラ・ソナタ第1番 ほか
チケット(税込)
一般 正面席4,000円/バルコニー席3,000円
U-25*(バルコニー席対象)1,500円
メンバーズ 正面席3,600円

発売日 一般 9.5(土) メンバーズ 8.29(土)

発売中

バッハ・コレギウム・ジャパン
ヘンデル《メサイア》
12.20(日)15:00 **音楽ホール**
[出演] 鈴木雅明(指揮)、シェザード・バンタキ(ソプラノ)、クリストファー・ローリー(アルト)、ダン・コークウェル(テノール)、ベンジャミン・ベヴァン(バス)
チケット(税込)
一般 正面席8,000円/バルコニー席7,000円
U-25*(バルコニー席対象)3,000円
メンバーズ 正面席7,200円

INFORMATION

速報!



シェイクスピア・グローブ座『ハムレット』 急きょ来日決定!

2014年春から、2年をかけて世界205か国での上演を目指してワールドツアーを始めたシェイクスピア・グローブ座の『ハムレット』が、とうとう日本にやってきます。日本公演は彩の国さいたま芸術劇場のみ! Globe to Globe (グローブ座から世界へ) と呼ばれるこのプロジェクト、出演俳優は12人だけ、音楽あり、歌ありで、“こんなに楽しくていいの!?”という『ハムレット』です(詳細は当財団HPをご覧ください)。OUDS『ロミオとジュリエット』と合わせてエネルギッシュなイギリス直送の舞台をご堪能ください!

シェイクスピア・グローブ座『ハムレット』(※英語上演/字幕なし/あらずし配布)
8.19(水) 18:30 / 20(木) 14:00 彩の国さいたま芸術劇場 小ホール
上演時間 2時間45分予定(休憩含む)
入場無料(要事前申込み・定員になり次第終了)
[申込方法] チケットセンターへお電話、または、彩の国さいたま芸術劇場窓口まで
[申込受付開始] 一般 7月26日(日) メンバーズ 7月23日(木)
[お問合わせ] チケットセンター 0570-064-939 (10:00〜19:00 彩の国さいたま芸術劇場休館日を除く)

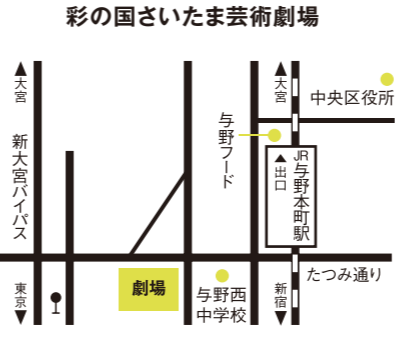
メンバーズに入会すると便利で楽しい特典がいっぱい!!

- | | |
|--------------------------------|--|
| 特典① メンバーズ料金 | 特典④ 財団情報誌をお届け |
| 財団指定の公演をメンバーズ料金で
ご覧いただけます | 公演情報満載の「埼玉アーツシアター通信」
をお送りします |
| 特典② 優先予約 | 特典⑤ チケット送料無料 |
| 一般発売よりも先に公演のチケットを
ご予約いただけます | 販売チケットは「安心のセキュリティバック
(補償付き)」でお届け |
| 特典③ チケット購入はキャッシュレス | 特典⑥ プレオーダー |
| チケット代、年会費は便利な口座引落し | 人気の公演では優先予約に先駆けて
プレオーダーを実施 ※プレオーダーは抽選 |

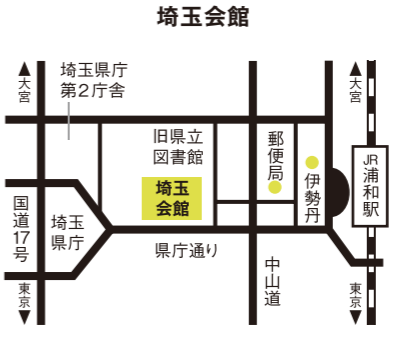
ご入会希望の方は、

メンバーズ事務局 Tel.048-858-5507 (彩の国さいたま芸術劇場休館日を除く 10:00〜19:00)

ACCESS



〒338-8506 埼玉県さいたま市中央区上峰 3-15-1
電話:048-858-5500(代) ファックス:048-858-5515
●電車でのアクセス
JR埼京線と野本町駅(西口)下車 徒歩7分
●バスでのアクセス
JR京浜東北線北浦和駅から西武バス大久保行き
「彩の国さいたま芸術劇場入口」下車 徒歩2分



〒330-8518 埼玉県さいたま市浦和区高砂 3-1-4
電話:048-829-2471(代) ファックス:048-829-2477
●電車でのアクセス
JR宇都宮線・高崎線・京浜東北線・湘南新宿ライン
浦和駅(西口)下車 徒歩6分

【サポーター会員】

(公財)埼玉県芸術文化振興財団は、演劇、ダンス、音楽を中心に、この劇場で見られない最高の作品を提供できるよう、蜷川幸雄芸術監督のもと、作品づくりに努めています。こうした財団の活動にご理解、ご支援をいただいているのが(公財)埼玉県芸術文化振興財団サポーター会員の皆様方です。

- (株)与野フードセンター / (株)亀屋 / (株)松本商会
- (有)香山壽夫建築研究所 / 埼玉新聞社
- テレビ埼玉ミュージック / 埼玉りそな銀行
- (株)パシフィックアートセンター
- (株)アサヒコミュニケーションズ
- FM NACK5 / 東京ガス(株)
- カヤバシステム マシナリー(株) / (株)タムロン
- (株)十万石ふくさや / 森平舞台機構(株)
- 東芝エルティーエンジニアリング(株)
- 埼玉トヨタ自動車(株) / 衛齋賀設計工務
- 武蔵野銀行 / 浦和ロイヤルパインズホテル
- アルビーノ村 / 国際照明(株)
- 埼玉スバル / 桶本興業(株) / (株)佐伯紙工所
- (株)太陽商工 / (株)しまむら
- (有)六辻ゴルフセンター / 不動開発(株)
- ピストロ やま / 埼玉県信用金庫
- (株)栗原運輸 / 彩の国S Pグループ
- (有)ブラネッツ / 関東自動車(株) / (株)デサン
- セントラル自動車技研(株) / 丸美屋食品工業(株)
- ボラスグループ / ひがし歯科
- 埼玉トヨペット(株)
- 公認会計士 宮原敏夫事務所
- (株)価値総合研究所 / (株)埼玉交通
- 医療法人 顕正会 蓮田病院 / (株)ウイズネット
- サイデン化学(株) / アイル・コーポレーション(株)
- 五光印刷(株) / 旭ビル管理(株)
- ヤマハサウンドシステム(株)
- (株)エヌテックサービス / (株)クリーン工房
- (株)つばめタクシー / (株)サンワックス
- (株)綜合舞台 / (株)タクトコーポレーション
- (財)さいたま住宅検査センター
- (株)国大セミナー / (株)NEWSエンターテインメント
- (株)オーガス / イープラス / 六三四印刷(株)
- 医療法人 櫻会 林整形外科
- 埼玉県整形外科医会
- 医療法人社団 山祥会 山崎整形外科
- サンケイリビング新聞社 / (株)三和広告社
- (株)セノン / ショッパー / (株)尾岸楽器商会
- JA埼玉県中央会 / 日本大学芸術学部
- (株)川口自動車交通 / (株)ホンダカーズ埼玉
- ファミリーマートあすまや / 南杉田電機
- 丸茂電機(株) / 太平ビルサービス(株)さいたま支店
- (株)片岡食品 / (株)協栄 / (株)ヨコハマタイヤジャパン
- NTT 東日本 埼玉事業部 / チャコット(株)
- (株)平和自動車 / 光陽オリエンタージャパン(株)
- 埼玉建設(株) / さくら Music Office
- クワバラ・パン・ぶきん / 駒橋内科医院
- 東和産業(株) / テレビ埼玉
- 日本ピストンリング(株) / 金井大道具(株)
- 国立大学法人 埼玉大学 / (株)七越製菓
- ビーンズ与野本町
- (一社)埼玉県経営者協会 / (株)コマー

お問合わせ
(公財)埼玉県芸術文化振興財団 サポーター会員担当
TEL 048-858-5507

チケット購入方法について

インターネット

SAF オンラインチケット
埼玉県芸術文化振興財団
オンラインチケット
【PC・携帯共通】
http://www.ticket.ne.jp/saf/

メンバーズ 登録のご住所へ無料配送
一般 **【クレジットカード決済】**
または**【コンビニ支払い】** ▶ **コンビニ発券**
※チケット代他に、店頭発券手数料 (チケット1枚につき120円) が必要です。
※コンビニ支払い後に宅配便での配送も承りますが、チケット代ほかに配送料(配送1件につき400円)が必要です。

電話予約

チケットセンター 0570-064-939
10:00〜19:00 (彩の国さいたま芸術劇場休館日を除く)
※一部の携帯電話、PHS、IP電話からは受付できません。

メンバーズ 登録のご住所へ無料配送
一般 **【クレジットカード決済】**
または**【コンビニ支払い】** ▶ **コンビニ発券**
※チケット代他に、店頭発券手数料 (チケット1枚につき120円) が必要です。
※コンビニ支払い後に宅配便での配送も承りますが、チケット代ほかに配送料(配送1件につき400円)が必要です。

窓口販売

下記窓口で直接購入いただけます。
電話予約したチケットの引取もできます。

- 彩の国さいたま芸術劇場 (10:00〜19:00)
- 埼玉会館 (10:00〜19:00) [9月末まで]

※休館日をお確かめの上、ご来場ください。

メンバーズ 【口座引落】
一般 **【現金】または 【クレジットカード決済】**
その場でチケットをお渡します。
※手数料はかかりません。



画●磯良一

出来るものなら気絶したい

文●岩松了

知り合いのEさんは女優。一人の娘さん(中学生)がいて、いわば主婦としても家庭を切り盛りしている。男ながら私は彼女の大変さが、ある程度はわかる。けれど彼女は弱音を吐かない。

ある時、一緒に飲む機会があった。別のある女優さんの話になったので、その女優さんに聞いた話をした。九州の炭鉱町出身のその女優さん、子どものころかわいがってくれた近所の家のお母さんがいた。その家は爪に火をともしような生活の中でコツコツと貯金をし、お父さんも家族のためによく働いていたそう。ところが、ある晩、炭鉱町のあらゆるくどもに誘われて博打に手を出した。始めのうち勝たされて、最後にはコツコツと貯めてきた貯金を全部吐き出してしまった。次の日、お母さんは自宅の障子の紙を薄ら笑いを浮かべながら、ビリビリと破いていた……そんな話だった。炭鉱町ならではの話だね、などと笑いあった。

やがて話は演劇の話になり、女の人が気絶するシーンがたまにあるけど、あれどうなの?という話題に及んだ。「あれ、ズルいですよね」とEさん。「人間なかなか気絶してしないよね」「でしょ?」「女、気絶する。暗転。あれなしですよ!」「気絶して、それで終わりってのはないよね」「そうですよ、気絶してからでしょ、問題は。なにカッコつけてんの、って話ですよ!」

心の中で、はてオレは、芝居の中で女を気絶させたことはなかったろうか、と懸命に過去の戯曲をおさらいしていた。ましてや、気絶させてそれで暗転にしたことは!?

一度ある、フラッと気絶しそうになる女、それをそばにいた者が手を出して助けようとする、それに対して女が「触らないで!」と言う。これならEさん許してくれるだろうか。でも、ここは言わずにすまそう。それがいい。

母として妻として家庭を支えているEさんにとって気絶はそのまま生活の放棄になるのに違いない。Eさんは言った。

「私だって、出来るものなら気絶したいですよ!」

いわまつ・りょう

劇作家、演出家、俳優、映画監督と幅広く活躍。

さいたまゴールド・シアター『船上のピクニック』『ルート99』の劇作を手掛けた。